Tulips University of Tsukuba Repository

# 李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」における「煙花」の解釈



| | |
|---|---|
| 著者 | 大橋 賢一 |
| 雑誌名 | 中国文化 ： 研究と教育 |
| 巻 | 67 |
| ページ | 44-57 |
| 発行年 | 2009-06-27 |
| URL | http://doi.org/10.15068/00150678 |

# 李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」における「煙花」の解釈

大橋賢一

## はじめに――問題提起――

故人西辞黄鶴楼　故人　西のかた黄鶴楼を辞し
煙花三月下揚州　煙花三月　揚州に下る
孤帆遠影碧空尽　孤帆の遠影　碧空に尽き
唯見長江天際流　唯だ見る長江の天際に流るるを

「黄鶴楼送孟浩然之広陵」（以下「黄鶴楼…」と略称）は、人口に膾炙する、代表的な李白の詩である。[1] 本詩はこれまで様々な視点から分析されてきているが、とりわけ「煙花」について論じたものが目立つ。これまで発表された「煙花」の専論は以下の通りである。

①中田伸一「「烟花」語解日中両国的対照分析」（『小山工業高等専門学校研究紀要』二八号、一九九六年）

②桜田芳樹「煙花」（後藤秋正／松本肇『詩語のイメージ』東方書店、二〇〇〇年）

③向嶋成美「煙花三月　揚州に下る」（『国語教室』八四号、二〇〇六年）

中田論文は「煙花」について目加田誠の訳（『唐詩三百首』東洋文庫、一九八二年）と劉首順の訳（『唐詩三百首全訳』陝西人民教育出版社、一九八六年）を通して、日中間の「煙花」の語釈を比較し、結論的には「霞たなびく春三月」という目加田訳を誤りとみなし、劉首順の「様々な花々が盛んに開く三月に揚州へと旅立っていく（在繁花盛开的三月去游扬州）」という解釈を支持している。その理由として、本詩の「煙花」に対する、従来の中国における解釈の中に「霞」という字が一字も見えないことを挙げている。続けて日本人が「煙花」に「霞」の意味を見出す理由を分析し、その理由を、一つ目に日本人の感覚で漢語を理解してしまうから、二つ目に日本人は朦朧とした情景の中に詩情を見出すから、三つ目に日本には黄河のような大

河はなく、想像で漢詩を翻訳するから、とまとめている。

桜田論文は、中田論文同様、「煙花」に対する現代中国人の解釈と日本の一般的な解釈を比較し、中国人の大半が「かすみ」という解釈をとらず、「花」そのもの、あるいは「繁華な春の景色」という解釈をとるのに対し、日本人の場合は「かすみと花」というように、例外はあるとしても「かすみ」の解釈をとるのが普遍的になっていると指摘する。次いで「煙」の語義を押さえ、「煙」を含む語句を検討しつつ、六朝から唐代にかけての「煙花」の用例を分析する。さらに中晩唐以降、華やかな「煙花」のイメージが、春を傷むイメージへと変化し、また季節も春に限定されることなく、夏、秋などにも歌われる場合があることを指摘する。かかる分析を通して、日中で李白の「煙花」に対する語釈が異なる理由を明らかにしている。また、結論としては、現代中国人の感覚に近い、「花が咲き乱れてぼうっと見えるさま」（高島俊男『中国古典詩聚花8』九八頁、小学館、一九八五年）という解釈を支持している。

向嶋論文は、六朝及び李白と杜甫の「煙花」の用例を分析した上で、「煙花」を「かすみ」と「花」と、並列の意味で捉えつつ、「もや、かすみがたなびく中で花が咲きほこる様子」と解釈する。さらに、孟浩然の向かう土地が「揚州」であることを踏まえ、李白の用いる「煙花」は、揚州の華やかさを暗示しているだろうと結論づけている。

なお、江戸の釈六如は「烟花ハタダ烟ナリ、花ハ飾字ニテ真ノ花ニ非ズ」（『葛原詩話』後編巻三）と述べた上で、本詩をはじめ、多数の例を挙げながら論証を試みている。また、合山究「中国文学と雲烟」（『雲烟の国』東方書店、一九九三年）は、「花」が実質的な意味を持たないという釈六如の説を引き、「春もたけゆくころの雲烟にけぶる江南の情景が詠われているのである」（一六〇頁）と述べ、同説を支持する。

このように、先行研究では「煙花」に対する解釈は一定しておらず、各見解をまとめると次のようになる。

A　もや、あるいは、かすみ（釈六如・合山）

B　花が咲き乱れてぼうっとみえるさま（中田・桜田）

C　もや、かすみがたなびく中で花が咲きほこる麗しい春景（向嶋）

本稿では各説を再検討することで、本詩の「煙花」をどのように解釈するのが妥当なのかを考察し、あわせてこのように解釈が分化する理由についても考えてみたい。

なお、本稿では「烟」と「華」を、「煙」と「花」の異体字とみなし、以下これらの字も検討の対象とする。ただ

し、「煙花」一般を論じる場合、この表記に統一する。また「煙」が、空気中に充満する水蒸気を意味する場合は、便宜的に「かすみ」と訓じることとする。

## 一　釈六如の再検討

まず、釈六如の説から再検討してみたい。先に触れたように、釈六如は「煙花」に花の意味はなく、かすみの意味しかないと断定する。ただ、その場合「煙花」は「用処ニヨリ結ビ合セテ人烟繁華ノ様子ニモナリ、又幽寂ノ趣ニモナル」と、詩によって別な意味合いを帯びるとも指摘している。華やかな都会のイメージを伴うものとしては、李白「黄鶴楼…」、及び晩唐の馬戴「送人遊蜀」（『全唐詩』巻五五五）の「人を愁えしむ処を過ぎ尽くさば、煙花は是れ錦城ならん（過盡愁人處、煙花是錦城）」を例として引き、南宋、江邁『容斎随筆』巻九の「揚一益二」を踏まえ、両詩の「煙花」が「繁華ナ様子」を意味するという。幽寂の趣を表す例としては、杜甫「泛江送客」（『杜詩詳註』巻二八）の「煙花山際に重く、舟楫浪前に軽し（煙花山際重、舟楫浪前軽）」及び、盛唐、遜逖「宿雲門寺閣」（『全唐詩』一一八）の「香閣　東山の下、煙花　象外に幽なり（香閣東山下、煙花象外幽）」を引く。杜甫にしても遜逖にしても、確かにひっそりとした風景が描かれている。以上の例について、釈六如は「此等ハ風烟ト云ニ同ジ。総テ風景ヲコメテ云」と述べ、「煙花」が風景一般を指すと指摘する。[2] 続いて「煙」が、かすみを指す例として、晩唐の陸亀蒙「翠碧」、元の呉鎮「笋」、明の僧清澯「夜坐」及び王衡「遊盤山」の三首を引くが、各詩の検討は省略する。次に、花が意味を持たない飾りの字である例として、「風花」と「鬖鬆花」を挙げ、南宋の陸游「雨脚　稍収まりて初めて日を見、風花　忽ち起りて又山を遮る（雨脚稍収初見日、風花忽起又遮山）」（「自開歳署無三日晴戯作長句」『剣南詩稾』巻一七）と、北宋の蘇軾「断蓬飛葉　黄沙を巻く、秖有り千林の鬖鬆花（断蓬飛葉巻黄沙、秖有千林鬖鬆花）」（「送曾仲錫通判如京師」『集註分類蘇東坡先生詩』巻二二）の例を引く。「風花」について、陸游は「風作らんと欲すれば則ち大霧充塞す。之を風花と謂う」と自注をし、一方「鬖鬆花」については、曽子固が「斉の地　寒さ甚だしく、夜気は霧の如く、木上に凝る。旦に起きて、之を視ること雪の如し（中略）。鬖鬆花は疑うらくは即ち此の者ならん」という注を付しているように、これらは、花そのものを指しているわけではない。ただ「風花」は風に吹きつけられた霧が花のようにみえること意味し、「鬖鬆花」もまた木

に付着した氷が花のようにみえることを意味していることは注意すべきである。釈六如は、これらについても「花」を「飾字」とみなしているが、厳密にいえば「花」は比喩としての機能を果たしているからである。

このように釈六如は多くの詩を例示しながら、「煙花」がかすみだけを意味していると結論づける。「煙花」が都会の華やかさや幽寂のイメージをもっているという指摘は妥当であろうが、「花」が意味をもたないという見解は妥当ではなかろう。花のような状態であることを表すときにも「○花」と表現される場合があることに注意しておく。

また、かかる考え方が李白の「煙花」についても当てはまる、という見方についても疑問が残る。というのも、李白自身が「煙花」をどのように詩の中で用いているのか、つまり、李白の「煙花」の用例や、その語感などを分析することが重要であるはずだろうが、釈六如は「黄鶴楼…」以外の「煙花」について、全く言及していないからである。そこで次に章を改め、李白詩の「煙花」を検討してみたい。

## 二　李白の詩における「煙」と「花」の検討

「黄鶴楼…」以外の、李白の詩における「煙花」の用例は、次に挙げる二首がある。

煙花宜落日　　煙花　落日に宜しく
糸管醉春風　　糸管　春風に醉う

（「宮中行楽詞八首」〈其三〉王琦本巻五）

万国煙花隨玉輦　　万国の煙花　玉輦に隨い
西来添作錦江春　　西来　添えて作す　錦江の春

（「上皇西巡南京歌十首」〈其九〉王琦本巻八）

この二例について、中田論文は「この二つの「煙花」は、いずれも春に様々な花が盛んに開いた、艶麗な景色を意味する（以上両个烟花的意思都春天百花盛开的艳丽的景色）」と述べているのに対し、向嶋論文は、前者については「ここで「煙花」は、弦楽器と管楽器を意味する「糸管」の語と対応して用いられているから、（中略）「もや、かすみ」と「はな」の並列とみてよい」と述べ、また後者については、「ここでいう「万国の煙花」は、ありとあらゆるところの「煙花」を意味するのであろうが、その「煙花」には、「もや、かすみ」と「はな」という本来の意味を保持しながら（中略）皇帝にまつわる華麗なる世界の象徴となっている」と述べている。桜田論文は、後者だけをとりあげ、「上皇の蜀巡行に錦上花を添えるまさに艶麗そのものの景色」と述べ、かすみの意味をとっていない。

そもそも、「煙花」の解釈が三種に分かれているのは、

語句構造の捉え方の相違が一因となっていよう。「Aもや、あるいは、かすみ」は、「花」を、花のような形状を意味する接尾辞とみなした解釈である。一方、「B花が咲き乱れてぼうっとみえるさま」は、「煙」が「花」を修飾しているとみなし、「煙」をかすみそのものではなく、不明瞭な状態、あるいは多くの花が一面に広がった状態を意味する語句として解釈したものだ。また「Cもや、かすみがたなびく中で花が咲きほこる麗しい春景」は、「煙」と「花」が並列になっているという前提で、かすみを意味する「煙」が「花」を修飾していると解したものである。

李白の用いた「煙花」について改めて見直してみると、先に触れたように、「煙花宜落日、糸管醉春風」（「宮中行楽詞」）は、対句になっており、対する「糸管」が弦楽器と管楽器という並列構造をなしているのは確かだから、この詩についていえば、「煙」と「花」が並列構造をなしていると断定できる。また、「煙」については、ぼうっとした状態を表す修飾語ではなく、実態を伴うかすみとして機能していることも裏付けられる。一方、「万国煙花隨玉輦、西来添作錦江春」（「上皇西巡南京歌」）は、「黄鶴楼…」同様、散句となっており、語句構造を特定するのが難しい。そこで、次に李白の詩において、「煙」と「花」がどのように機能しているのかを検討してみたい。なお、調査には、花房英樹編『李白歌詩索引』（京都大学人文科学研究所、一九五七年）を用いた。

「煙」について同索引は「煙花」を除く「煙〇」という形の熟語を二一例挙げている（「烟」を含む）。このうち、「煙花」同様、「煙」が植物を表す語句と結びついているものは「煙草」「煙樹」「煙蘿」の三種である。これらの語句がどのように用いられているのか確認してみよう。

青松来風吹古道　青松　風を来たして古道を吹き
緑蘿飛花覆烟草　緑蘿　花を飛ばして烟草を覆う
（①「鳴皋歌奉餞従翁清帰五崖山居」王琦本巻七）

相思若烟草　相思　烟草の若く
歴乱無冬春　歴乱　冬春無し
（②「送韓準裴政孔巣父還山」王琦本巻一六）

沅湘春色還　沅湘　春色還り
風暖烟草緑　風暖かくして烟草緑なり
（③「春滞沅湘有懐山中」王琦本巻二三）

この中、対句となっているのは①の例だけであるが、「古道」が「古い道」を意味し、修飾構造であることは明らかだから、対応する「烟草」も修飾構造と見なすべきで、かすみのかかった草、あるいはかすみのように広がる多く

の草と解釈するのが妥当である。②③の例は散句であるが、句で表されている意味を踏まえると、語句の構造が特定できそうである。②はお互い思いやる気持ちが、草の靡く様子に喩えられていよう。従って「烟」は、かすみ、あるいは草の多い状態を意味する修飾語と考えられる。③の例は、「烟草」の述語が「緑」だから、②と同じと考えられそうだ。ただ「沅湘」が川名であることから、かすみがかかった状態を意味している可能性が高いように思われる。

青蘿嫋嫋挂烟樹　青蘿嫋嫋として烟樹に挂り
白鷴処処聚沙堤　白鷴処処　沙堤に聚まる

（「和盧侍御通塘曲」王琦本巻八）

ここでの「煙樹」は対句の中で用いられており、対応する「沙堤」が「沙の堤防」を意味するのは確かだから、対応する「烟樹」についても、「烟」を修飾語とみなすことが妥当である。また本詩の冒頭にみえる「君は誇る　通塘好く、通塘の耶溪に勝るを。通塘　何れの処にか在らん、遠く尋陽の西に在り（君誇通塘好、通塘勝耶溪。通塘在何処、遠在尋陽西）」という記述によれば、「通塘」は水辺に位置する地名だとわかるから、「広がった樹木」というよりも「かすみのかかった樹」と解釈するのが穏当であろう。

惜去愛佳景　去るを惜しんで佳景を愛す
烟蘿欲暝時　烟蘿　暝れんと欲する時

（「同族姪評事黯遊昌禅師山池二首」〈其二〉王琦本巻二〇）

本詩が昌禅師の池辺で遊んだときのものであること、また冒頭に「客は来る花雨の際、秋水　金池に落つ（客来花雨際、秋水落金池）」とあることを踏まえると、「烟蘿」はかすみのかかった蘿と解するのが穏当であろう。

以上のように、李白の詩における「煙」は、「鳴皐歌奉餞従翁清帰五崖山居」などのように、草の広がりや多さを形容し得る例もあったが、そのほとんどが、かすみという実質的な意味を伴う傾向の高いことが確認できる。

「花（華）」については、「煙花」を除く「〇花」という形の熟語が五三例、「〇華」が一七例ある。このうち、「煙花」同様、気象と関連する語が修飾語になっている「雪花」「雨花」の二語について検討してみたい。

燕山雪花大如席　燕山雪花　大なること席の如く
片片吹落軒轅台　片片吹き落つ　軒轅台

（①「北風行」王琦本巻三）

この詩の「雪花」は雪そのものを指し、「花」は雪の舞い散る状態を意味する。つまり、「花」は「雪」の暗喩となっており、先に見た「風花」「鬖髿花」と同じ働きをし

ていることがわかる。比喩としての「花」の意味を含みつつも、「雪」そのものを指しているという点で、「Aもや、あるいは、かすみ」の解釈の旁証となり得よう。無論、「雪花」が、白い花を意味する例として、「柳翠　煙葉を含み、梅芳　雪花を帯ぶ（柳翠含煙葉、梅芳帯雪花）」（初唐、高正臣「晦日置酒林亭」『全唐詩』巻七二）を挙げることもできるが、李白の場合は「北風行」以外の例についても、

宝剣双蛟龍　宝剣　双蛟龍
雪花照芙蓉　雪花　芙蓉を照らす

（②「古風五九首」〈其一六〉王琦本巻一）

瑤台雪花数千点　瑤台の雪花　数千点
片片吹落春風香　片片吹き落ちて春風香る

（③「酬殷明佐見贈五雲裘歌」王琦本巻八）

雪花酒上滅　雪花　酒上に滅し
頓覚夜寒無　頓に覚ゆ　夜寒無きを

（④「秋浦清渓雪夜対酒客有唱山鷓鴣者」王琦本巻二〇）

地白風色寒　地は白くして風色寒く
雪花大如手　雪花　大なること手の如し

（⑤「嘲王歴陽不肯飲酒」王琦本巻二三）

画堂晨起　画堂　晨に起くれば
来報雪花墜　来たり報ず　雪花の墜つるを

（⑥「清平楽三首」〈其三〉王琦本巻三〇）

というように、「花」のような「雪」を意味している。つまり、「雪花」については、李白は「花」を「雪」の形態を表す語句として用いているのである。一方、「雨花」は次のように用いられている。

漫漫雨花落　漫漫として雨花落ち
嘈嘈天楽鳴　嘈嘈として天楽鳴る

（「登瓦官閣」王琦本巻二一）

詩題にみえる「瓦官閣」は、南京の西に位置していた寺院の名称。王琦は『阿弥陀経』の「彼の仏国土は、常に天楽を作す。昼夜六時、天の曼荼羅花を雨らす」を踏まえ、「雨花とは、諸天の空中に花を散じて供養するものなり。雨の天従り下るが若し。故に雨花と曰う」と述べている。王琦のいうように「雨花」が、慈雨のように空から舞い落ちる花を意味するのであれば、「雨花」を修飾構造と解することができる。

また、修飾構造をなすものではないが、次に挙げる例は注目に値しよう。

眼花耳熱後　眼花み耳熱する後
意気素霓生　意気　素霓生ず

（「侠客行」王琦本巻三）

「眼花耳熱」は、西晋の張華「軽薄篇」（『楽府詩集』巻六七）にみえる「三雅の来るは何ぞ遅きや、耳は熱りて眼の中は花む（三雅来何遅、耳熱眼中花）」（訓読は入谷仙介『古詩選』一七九頁、朝日新聞社、一九六六年による）を踏まえたことばで、酒に酔って眼がかすんだ侠客を「花」で表している。典故表現ではあるが、李白がかすんだ状態を表現する際に「花」を用いているのは興味深い。

このように、「花」については「雨花」のように修飾構造と解し得るものがある一方で、「雪花」のように、花そのものを意味しない、形状を表す、つまり比喩として機能する用法が確認される。同時に、「眼花」のように「煙」同様、ぼんやりとした状態を意味し得ることが確認できる。

以上の検討から、「雪花」「眼花」は「Aもや、あるいは、かすみ」を、「烟草」「烟草」「烟樹」「烟蘿」は「B花が咲き乱れてぼうっとみえるさま」を裏付ける例となり得ることが確かめられた。一方、「Cもや、かすみがたなびく中で花が咲きほこる麗しい春景」という解釈――並列構造と見なした上で修飾構造としてよみとることができる例は見出し得なかったが、「烟草」「烟草」「烟樹」「烟蘿」の「烟」が「かすみ」そのものを意味する可能性が高いことを踏まえると、少なくとも「かすみ」を意味する修飾語として「煙」が機能していることは断定できる。

そこで、次に視点を変えて「煙花」を通してうたわれた場所である「揚州」を、李白がどのように歌っているのかを検討することで、解釈を定める可能性を探ってみたい。

## 三　李白の詩おける「揚州」の検討

「黄鶴楼…」を除く李白の詩において、「揚州」を詩題、及び詩句によみ込んだものは六例、「広陵」は七例ある（琴の曲名を意味する「広陵散」の二例を除く）。この中、李白の「揚州」に対する見方が顕著に表れているものは、「経乱離後、天恩流夜郎憶旧遊書懐、贈江夏韋太守良宰」（王琦本巻一一）であろう。これは、永王璘の反乱が平定され、その軍営に入っていた罪で夜郎に流されることになった李白が、自身の生涯を振り返り、その思いを記した八四聯からなる五言の長篇詩である。この詩の中ほどにあたる五八聯目以降に、「揚州」が次のように歌われている。

58 江帯峨眉雪　　江は峨眉の雪を帯び
　川横三峡流　　川は三峡の流れを横う
59 万舸此中来　　万舸　此の中に来たり
　連帆過揚州　　帆を連ねて揚州を過ぐ
60 送此万里目　　此の万里の目を送り

曠然散我愁　　曠然として我が愁いを散ず

この箇所は峨眉山の雪解け水を汲みつつ、三峡を通り鄂州を経由して揚州に到るまでの長江の流れを描写したものである。「万舸」は、王琦が「楚は大船を以て舸と曰う」（『広韻』）と注をしているように大型船を指す。また同注が引用する、陸游『入蜀記』巻四では、

至鄂州、泊税務亭、賈船客舫、不可勝計。銜尾不絶者数里、自京口以西、皆不及。李太白贈江夏韋太守詩曰、万舸此中来、連帆過揚州。蓋此地自唐為衝要之地。

鄂州に至り、税務亭に泊し、賈船客舫、計るに勝うべからず。尾を銜みて絶えざる者数里、京口より以西、皆及ばず。李太白の「贈江夏韋太守」詩に曰く、「万舸此の中に来たり、帆を連ねて揚州を過ぐ」と。蓋し此の地　唐より衝要の地為らん。

と、鄂州の繁華な様子が描かれ、五九聯目が引用されている。李白はこの詩で「揚州」の賑やかで華やかな様子を直接うたっているわけではないが、大船からなる商船団を通して、揚州に富がもたらされることを間接的に表現していると言えよう。さらにまた、この商船団が揚州に下っていくのをみて、大きな気持ちになって愁いが消えたと述べていることから、物資豊かな、景気の好い土地として揚州を眺めていたと思われる。

## 四　李白以前の「煙花」の検討

ここでは、中国詩史の上で「黄鶴楼…」における「煙花」の意味を検討するために、李白以前の詩人たちが、どのように「煙花」を用いていたのかを概観してみたい。向嶋論文には、唐代以前の詩における「煙花」の用例として、次の三首が示されている。

相望早春日　　相望む　早春の日
煙花雑如霧　　煙花雑じりて霧の如し
（①同右「芳樹」『謝宣城集校注』巻二）

年芳被禁籞　　年芳　禁籞を被い
煙華繞曾曲　　煙華　曾曲を繞る
（②斉、沈約「傷春」『初学記』巻三）

①は、向嶋論文が「「煙」と「華」が雑じりあって霧のようだというのであって、その「煙」と「華」は、もう紛れもなく「もや、かすみ」と「はな」であるに違いない」というように、並列構造とみなし得る例である。②は対句になっており、「年芳」が「春の華やかさ。または春の花」（花房英樹『文選』四四一頁、集英社、一九七四年、沈約「三月三日率爾成篇」の語釈）を意味するのは明らかだから、

「煙華」も、かすみのかかった花、あるいはかすみのように一面に広がる多くの花々と解することができる。なお、②については、「禁籞」が禁園の囲いを意味していることから、春の到来した禁園の華やかさを彩るものとして「煙華」が用いられていることに注意をしておきたい。

煙華乍舒巻　煙華　乍ち舒巻し
蘅芳時断続　蘅芳　時に断続す

（③斉、王融「巫山高」『玉台新詠箋注』巻四）

③の「煙華」は、原文では「煙霞」に作っているので、参考として確認しておこう。この聯は対句になっており、「煙華」に対応する「蘅芳」が蘅（＝香草の名）の芳香を意味し、修飾構造となっているのが明らかだから、かすみのかかった花、あるいは、多くの花々と解釈できるものである。

唐代以降李白までの例について、『全唐詩』（故宮寒泉古典文献全文検索資料庫による）を検索すると、初唐の詩人による次の六例が確かめられる。

円池類璧水　円池は璧水に類し
軽翰染煙華　軽翰は煙華に染まる

（①楊師道「詠硯」巻三四）

苔石隨人古　苔石　人に隨いて古く
煙花寄酒酣　煙花　酒を寄せて酣なり

（②張九齢「故刑部李尚書荊谷山集会」巻四八）

帰去嵩山道　帰り去る　嵩山の道
煙花覆青草　煙花　青草を覆う

（③劉希夷「帰山」巻八二）

煙花飛御道　煙花　御道に飛び
羅綺照昆明　羅綺　昆明を照らす

（④陳子昂「于長史山池三日曲水宴」巻八四）

日月渝郷思　日月　郷思に渝り
煙花換客愁　煙花　客愁に換る

（⑤沈佺期「従驩州廨宅移住山間水亭贈蘇使君」巻九七）

煙花恆献賦　煙花　恆に賦を献じ
泉石毎称觴　泉石　毎に觴を称ぐ

（⑥沈佺期「答魑魅代書寄家人」巻九七）

①は硯をとりあげた詠物詩で、墨汁を「煙華」に喩えた従来にはない例である。「煙華」に対する「璧水」は硯を喩えたもの。「璧水」は天子の大学、辟雍を取り囲む池を指す。従って、この詩の「煙華」は修飾構造とみなし得る。

②は山での酒宴をうたったもの。①同様、この聯も対句となっており「煙花」に対する「苔石」が、苔のむした石であることが明らかだから、修飾構造とみなし得る。

③は帰隠をうたったものである。この聯は散句であって、語句の構造を特定するのが難しい。陳文華は「煙花」に「艶丽的春花」（『劉希夷詩注』二〇頁、上海古籍出版社、一九九七年）と注するが、修飾構造あるいは並列構造とみなしても意味が通じるように思われる。ただ、述語が「覆」であることから、かすみのかかった花々、あるいは多くの花が咲き乱れているさま、とみなすのが穏当であろう。また、②③は山里の春景を描写するものとして、「煙花」が用いられていることに注意しておこう。とりわけ③からは、山に隠遁することをうたった詩で用いられているだけに、「煙花」と隠者との結びつきが強くなっていることが確認できる。

④は曲水の宴をうたったもので、三月三日の春景色を描写する際に「煙花」が用いられているものである。引用箇所は対句になっており、「煙花」に対する「羅綺」は、うすぎぬとあやぎぬを指し、並列構造となっている。ここでは、このような高価な服を身に着けた、宴席の参列者を暗示していよう。「昆明」について、彭慶生が「指昆明池、故址在今陝西西安市西南」（『陳子昂詩注』七九頁、四川人民出版社、一九八一年）と注をしているように、恐らくこの詩は都近郊でうたわれたものだろう。従って「煙花」は、于長史の山池から都にいたる「御道」を飛来する、かすみと花、あるいは都近郊の春景を意味していると考えられる。

⑤の詩題にみえる「驩州」は、沈佺期が流された土地で、現在のベトナムビン市に位置した南方の辺境地である。この聯も対句になっており、「日月」が並列構造をなしていることから、対する「煙花」も、かすみと花の並列となっているとみなし得る。ただ、ここでは「日月」が文字通り太陽と月を指しているのではなく、両者が象徴する「時間」を意味するのは明らかだから、「煙花」についても、語句構造自体は並列とみなし得るが、春景色一般を意味していると考えられる。なおこの詩で、沈佺期が「煙花」を目にして、ますます旅人としての愁いを募らせているのは、「煙花」が都を連想させる意味合いをもっているからであろう。

⑥は、帝都を追われた理由について、魑魅に自身の影が答えるという形式の、一風変わった問答体の詩である。引用した聯は、都で活躍していた頃を思い描いた部分である。この一聯も対句になっており、「煙花」に対する「泉石」は、ひとまず文字通り泉と石と解することができるから、「煙花」もまた、かすみと花と解することができるだろう。ただ、連波・賓洪徳が「烟花、春天的景色、这里是指賞春」

「泉石、指山水佳処」（『沈佺期詩集校注』一六〇頁、中州古籍出版社、一九九一年）と注をするように、⑤の例同様、「煙花」が春の景色一般を象徴するものとして、「泉石」が山水の景勝地を象徴するものとして用いられていよう。

沈佺期にとって、「煙花」は都の華やかな春を連想させるものであると同時に、都との隔たりが自覚されるものだったに違いない。だからこそ、左遷先の驩州で目にした「煙花」をみて、旅人としての愁いが一層つのったのではなかろうか。「煙花」が、ある場所とある場所とが隔たっていることを象徴するのは、合山氏が指摘しているように、「隔絶感や離別感を起こさせるもの」ものとして、「烟波」「雲山」「烟水」などといった語句が用いられるのと同じく、かすみを意味する「煙」を含んでいるからだ（「中国文学と雲烟」『雲烟の国』一五四頁）。また、都の華やかさを想起させるものとして、「花」がその役割を果たしていることは、これらの例から十分に考えられることである。

このように、六朝から李白以前の唐代の用例を検討してみると、「煙花」は並列構造、あるいは修飾構造となっており、かすみと花、あるいはかすみのかかった花という意味を持っていることが確認できた。ただ、初唐以降は、こうした語句構造を持ちながらも、春景色を象徴するものとして、山里の春、あるいは華やかな都会の春を意味するようになったといえる。また、劉希夷の例から、隠者の住まう場所を象徴するものとして、さらに陳子昂、沈佺期の例からは、都の春そのものを、あるいは都の春を想起させるものとして「煙花」が機能していることが確かめられた。

山里の春をうたうものとしての「煙花」は、釈六如が幽寂の趣を帯びた例として挙げた、杜甫「泛江送客」や遜逖「宿雲門寺閣」などに引き継がれているのだろう。一方、沈佺期の、都を想起させる「煙花」は、例えば劉長卿の「旅次丹陽郡、遇康侍御宣慰召募、兼別岑単父」の冒頭に、次のように引き継がれているようだ。

客心暮千里　客心　千里に暮れ
回首煙花繁　首を回らせば煙花繁たり
楚水渡帰夢　楚水　帰夢に渡り
春江連故園　春江　故園に連なる
羈人懐上国　羈人　上国を懐い
驕虜窺中原　驕虜　中原を窺う

これは、丹陽（江蘇省鎮江市）における旅中の詩であるが、「驕虜窺中原」というように、安史の乱のために都に帰ることができない状況でうたったものである。儲仲君が「この二句は、春真っ盛りの時節にあたり、一層望郷の念

が増していることを意味する（二句意謂時當盛春而益増郷思）」（『劉長卿詩編年箋注』九八頁、中華書局、一九九六年）と注をしているように、「煙花」が都の華やかな春を連想させ、また都と離れていることを実感させるものとして機能していることは明らかだろう。

李白の「煙花」について、以上に検討してきた中国詩史の系譜の上において考えてみると、「宮中行楽詞」「上皇西巡南京歌」の二例については、陳子昂、沈佺期を引き継いでいるとみなし得る。また「黄鶴楼…」については、揚州は都ではないにしても、江南における経済の発展した華やかな都市として、李白が認識しているのは明らかだから、その揚州を、都長安にも匹敵するような、華々しい場所として描くために「煙花」という語句で表したとしても不自然ではないと思われる。

## まとめ

「黄鶴楼…」の「煙花」が大きく三つの解釈にわかれ、それぞれの解釈が通行している要因としては、起句と「煙花」を含む承句が散句の関係になっており、語句の構造が特定しにくいだけに、解釈に揺れが生じやすいことが挙げられる。また、初唐期に「煙花」＝春景の象徴という図式が確立されたことも挙げられよう。

李白の「煙」「花」に対する語感に基づけば、「黄鶴楼…」の「煙花」は、ＡＢＣいずれの解釈も可能であると言えそうだ。しかし、李白が揚州に対し華やかな街という意識をもっていたということ、また本詩が沈約や陳子昂、沈佺期の系譜に連なると判断するならば、かすみと花々、あるいは、かすみのかかった花の咲き誇る華やかな春の景色を表しているとみなすのが穏当だと思われる。そして何よりも、この詩をこのようによむことが最も魅力的なよみを引き出すのではないだろうか。「Ａもや、あるいは、かすみ」のように解釈すると、孟浩然と李白との距離の隔たりをよみ取ることはできるけれども、孟浩然がこれから向かおうとする、春の揚州の華やかさをよみとることができなくなってしまう。一方、「Ｂ花が咲き乱れてぼうっとみえるさま」のように解釈すると、花の多さが強調されるだけに、二人の距離の隔たりを暗示する、ベールとしての「かすみ」の意味合いが、やや薄れてしまうように思われる。

戸倉英美氏がいうように、この詩が「一面の花と霞とに包まれた春三月、揚州という繁華な都へと下っていくという華やかさが、三・四句の寂寥を一層大きく膨らませている」（『詩人たちの時空』二七五頁、平凡社、一九八八年）

るのだとすれば、ＡＢの解釈では、李白の孟浩然に対する「寂寥」の念が希薄になってしまうのではなかろうか。

基づくところがあるのだとすれば、いずれの解釈も認めることはできよう。ただ、解釈の選択肢が複数に亙る場合は、より魅力的なよみにつながる解釈をとることこそが、詩をよむという行為になるのではなかろうか。旅立つ者が向かう場所に華やかさを彩る「花」、旅立つものとの空間的な隔たりを象徴する「煙」――これらから喚起される意味をよみとることで、別れの詩としての本詩の魅力は一層増すことであろう。

## 注

(1) 以下、李白の詩の引用は、王琦注『李太白全集』（中華書局、一九七七年）による（以下、王琦本と略称）。「黄鶴楼…」については、王琦本では「碧空」を「碧山」に作るが、「碧空」に作るのが一般的であるから、ここではひとまず『唐詩三百首』によった。

(2) 「風烟」が風景を指す例が示されていないが、例えば「耳目　異賞多し、風烟に奇状有り（耳目多異賞、風烟有奇状）」（盧照鄰「奉使益州至長安発鍾陽駅」『全唐詩』巻四一）がその例に該当しよう。

（北海道教育大学旭川校）